

# 漢字とかなとハングル<1>

-漢字をつかわない日本語をつくりだすために-

<『むくげ通信』293号 2019.3.31より> 近藤富男

## 1きっかけ（その1）

■コリア語をまなびはじめてもう40年以上になる。いまだにちょっとした文書さえ、辞書なしではよめないし、会話もせいぜい旅行がなんとかできるくらいである。年齢とともに脳はますますかたちになり、あたらしい単語はあたまのなかにとどまってくれない。それでも、わずかずつではあっても、ながいあいだつづけてきたことで、逆に、日本語に対する理解がコリア語をまなんていよいよはふかまたとおもっている。同時にハングルという、コリア語をかきあらわす文字についても、そのなりたちや構造、特徴についてまなぶことができた。

■この間、日本語とコリア語に共通してあることばについて、いろいろさがしてはたのしんできた。ソウル南山のユースホステルちかくにある「世界のへそ(세상의 배꼽 セサンエ ペコ p)」となづけられた場所にいったとき「へそ」のことをコリア語では「ペコ p(배꼽)」ということをしつったときはすこし興奮した。もともとは、「はらがへった(배 고프다. ペコプダ)」からできたことばだときいたことがあるが、日本語でアルミの弁当箱がなにかにあたってへこんだときにいう擬態語は「ペコッ」だし、おなかの一部へこんだところをしめす語「ペコ p」となんの関係もないとはかんがえられない。

■あるいは、まごに絵本をよんでやっていたあるとき衝撃的にうかんだかんがえは「いないいない、ばあ！」の「ばあ！」は「みて！(卑 ボア)」ではないかというのだ。日本語に「ばあ」にあたることばがないことからすれば、いつのころかコリア語からはいってきたものではないだろうか。

■また、『韓国「反日街道』をゆく～自転車紀行 1500キロ～』(前川仁之著)で、ヨモギのことを竽(ス k)というとしたときのおどろきもおおきかった。いなかでそだって5月6月ごろのヨモギのそだちかたをしっているものなら、これが日本語の「すくすく」の語源じゃないかとかんがえるのは自然である。

■ほかにいくつか例をあげてみよう。

○おぶう・おんぶする…업어 가다 (せおついく・オボカダ)

○あちゃー…아차 (不注意や失敗に気づいてだすこえ：あっ、しまった・アチャ)

○こする…거슬리다 (感情・感覚にさわる、ふれる・コスルリダ)

거스르다(逆らう・反抗する・コスルダ)

○まぶしい…「ま」は「まぶた」「まつけ」「まなり」などの「ま」、つまり「目」。

→「まぶしい」は「目ぶしい」

는부시다 (「ヌンブシダ(まぶしい)」の「ヌン」は「目」→「ヌンブシダ」は「目ブシダ」)

○まず…「まず」を東北地方の方言で「まんず」というが、コリア語では먼저(モンジョ)という。

○まつけ…「まつけ」の「つ」は「～の」の意味の古語。この「つ」はコリア語の「～の」の意味を表す「ㅅ (사이시옷サイシオッ：発音は促音ッ)」である(とおもう)。「바다 (パダ・海)」「の」「가 (カ・ほとり、辺)」→「바닷가 (パダッカ)」の「ツ」

■また、何度か韓国を旅行するうち、ハングルの「おそるべき」ちからをかいまみることもあった。最初に気づいたのは「叭거깅」である。この文字は「BURGER KING」の看板のしたにあった。カタカナでかくと「バーガーキング」。この文字数をくらべてみてほしい。アルファベット 10 文字、カタカナ 7 文字に対して、ハングルはなんと 3 文字である。ほかに、たとえば「QUEEN(クイーン)」は「퀸」、「quick (クイック)」は「퀵」と一文字でかけるのである。

■コリア語をまなびはじめたころ、「ハングル」の意味を「偉大な・文字」だとおしえられ、いくらなんでもたかが文字に「偉大な」はちょっとおおげさではないかと、きもちがひいたことをおぼえているが、その後、まなべばまなぶほどハングルの偉大さに気づいてきた。ハングルのなりたちについては、ほとんどの「コリア語」本でふれられているが、子音はその音を発声するときのはじめの口腔内のかたちをあらわしている。「ㄱ」は発声のはじめにおいて「した」のおくの部分が口蓋につくぐらいに盛り上がっているかたちをあらわし、「ㄴ」はおなじように「した」のさきがうえのはのうらについているかたちをあらわしている。「ㅁ」は発声のまえに一度くちをとじることをしめし、「ㅅ」はうえしたの歯が接することをしめしている。また、「ㅇ」は発声時にはきだすいきがなんの抵抗もなくなるよう

に、のどをあけはなしているかたちをしめしている。

■そして、「ㅋ, ㄲ」は「ㄱ」とおなじかたちから発声するためにその文字のなかに「ㄱ」とおなじ部分（ㄱ）をもち、「ㄷ, ㅌ」は「ㄴ」とおなじかたちから発声するためにその文字のなかに「ㄴ」とおなじ部分（ㄴ）をもっている。「ㅂ, ㅍ」は「ㅁ」とおなじ部分（ㅁ）を、「ㅅ, ㅊ」は「ㅅ」とおなじ部分(ㅅ)を、「ㅎ」は「ㅇ」とおなじ部分（ㅇ）をもっている。

■つまり、すべての子音をあらわす文字のかたちそのものが、その発声のしくみをあらわし、どれとどれがおなじ系統に属する音なのかまで、わかるようになっているのである。これほどまでにかんがえぬかれた文字は世界ひろしといえどもハングルをのぞいてはないであろう。

■ハングルには平音とともに、激音（いきをつよくはく音）と濃音（日本語の促音様の音）があるが、激音、濃音ともに平音の变形である。

「ㅅ」に一画くわえれば、激音「ㅊ」となり、「ㅆ」とかさねれば濃音となる。

「ㄱ」に一画くわえれば、激音「ㅋ」となり、「ㄲ」とかさねれば濃音（ローマ字の kk）となる。

「ㄷ」に一画くわえれば、激音「ㅌ」となり、「ㄸ」とかさねれば濃音（ローマ字の tt）となる。

「ㅂ」を变形すれば、激音「ㅍ」となり、「ㅃ」とかさねれば濃音（ローマ字の pp）となる。

「ㅇ」に二画つけくわえれば、激音「ㅎ」となる。  
「ㅎ」をかさねて「ㅆ」とすれば濃音となる。

このようにかんがえてくると、結局ハングルの子音はㄱ ㄴ ㄷ ㅌ ㅂ ㅍ ㅅ ㅎ の 9 文字を基本になりたっていることになる。

■基本母音は「ㅏ」「ㅑ」「ㅓ」「ㅕ」「ㅗ」「ㅛ」「ㅜ」「ㅛ」「ㅡ」「ㅣ」の 10 文字であるが、これも  
「ㅏ(ア)」に一画くわえれば拗音「ㅑ(ヤ)」となる  
「ㅓ(オ)」に一画くわえれば拗音「ㅕ(ヨ)」となる  
「ㅗ(オ)」に一画くわえれば拗音「ㅛ(ヨ)」となる  
「ㅜ(ウ)」に一画くわえれば拗音「ㅛ(ユ)」となる  
ことをかんがえれば結局、

ㅏ ㅑ ㅓ ㅕ ㅗ ㅛ ㅜ ㅛ ㅡ ㅣ の 6 文字が基本になっていることがわかる。つまり、拗音、複合母音ふくめて、ハングルは究極、子音 9 文字と母音 6 文字、あわせて 15 文字をおぼえることで、基本的にすべての文字をよみ、かくことができるるのである。

■一方、宝塚市立中学校、兵庫県立芦屋国際中等教育学校で計 37 年間日本語(国語)教育にたずさわってきたことでみてきたこともある。特に、芦屋国際中等教育学校で、外国からきたこどもに日本語をおしえるなかで痛感したのは、おもに非漢字圏のくにからきたこどもにとって漢字がどれほど学習の障害になっているかということである。漢字がわからなければ、「国語」の教科書だけでなく、すべての科目の教科書がよめず、学習がすすまない。「日本語はむずかしい」と何度もきかされた。

■しかし、かんがえてみれば日本語には名詞の格変化がなく、助詞をつけるだけでどんな格にでもなる。助詞をいくつかおぼえれば語の順番さえ気にしなくとも意がつうづる。男性名詞女性名詞の区別もない。さらに、ほかのおおくの言語では動詞が主語に連動し、主語が一人称か二人称か三人称か、単数か複数か、女性(名詞)か男性(名詞)かによって変化するが、日本語の動詞は主語の別に影響されることがない。これで、なぜ「日本語はむずかしい」となるのか。日本語をむずかしくしているのは漢字ではないのか。日本語の「詞(ことば)」のうしろには漢字がはりついている。同音異義語・同訓異義語がおおく、はなされたことばも、かなでかかれたことばも、そのうしろにはりついている漢字をおもいうかべなければ文意がわからない。

■さらに、日本語においてはひとつの漢字が、おおくの場合ふたつ～みつつのよみをもっている。特別な例ではあるが、「生」など、「いきる」「いかす」「いける」「うむ」「うまれる」「はえる」「はやす」「おう」「なま」「き」「セイ」「ショウ」と、12 とおりもあるのだからたまらない。その漢字を小学校 6 年間で 1006 字、中学校 3 年間で 1130 字ならうことになっていて、計 2136 字が常用漢字とされている。すなわち日本語でかかれた新聞や一般的な書籍をよむためにはこれだけの漢字の習得が必要となるのである。これにくわえて最近は、日本語ワードプロセッサがひろくつかわれるようになったおかげで、一般市民の作成する文書のなかにもおおくの漢字があらわれるようになっている。専門分野の本をよもうとおもえば、さらにむずかしい特別な漢字でかかれた用語(褥瘡など)を理解しなければならない。日本の大学でまなぶためには、膨大な数の漢字を習得しなければならないのである。

■つぎは、2018年7月30日の朝日新聞『声』欄にのっていたものである。傍線部をみてなにをかんがえるか。もちろん、全体をとおしてこの生徒のがんばりに拍手をおくりたいきもちはあるが、ここに、「言葉」以外に「漢字」もおぼえなければならぬ「日本語をみにつける」ための苦労があることがあきらかにみてとれるではないか。

「泣かずに頑張り言葉覚えた」

高校生 ○○ アン (○○県 18歳)

日本で働く母に呼ばれ、フィリピンから来日して8月で丸3年になります。一番頑張ったことは日本語の勉強です。本来中学2年でしたが、当時の私は日本語が全然話せず、中学1年になりました。勉強しても日本語が全然覚えられなくて本当に苦しかったです。

いつも泣いていた当時の私に、母は「勉強して強くなるしかない」と言いました。そこで、泣かずに頑張って一つずつ言葉、そして漢字を覚えるようにしました。日本語がおかげでも、間違えて他の人に笑われても話してみる、それを繰り返しました。その結果、2年からは友人ができました。この経験を生かしてこれからも前向きに頑張ります。」

■日本で生まれ日本でそだつこどもにとっても漢字の習得は容易でない。「百字練習帳」などというノートがあるが、漢字の習得がたやすいことでないことを証明している。これほど何度もかかねばみにつかないとなれば、それだけほかのまなびの時間がけずられているということではないか。

■漢字の魔力も要注意である。たとえば「えいれい」、背後に漢字をおもいかべなければとくに印象のないことばだが、漢字で「英靈」とかくといきなりなんだか尊い、うつくしいものにかわってしまう気がする。過去に日本がおこなった戦争では本当におおくの人命がうしなわれた。わけてもアジア太平洋戦争では、アジア各地で2000万人（また3000万人とも）以上のいのちをうばい、日本人も300万人以上がなくなったといわれている。うち、210万人が日本の兵士であるが、そのおおくは兵站を無視した無茶苦茶な作戦のなかで、うえてなくなったひと、病気でなくなったひとが過半数だとされている。悪名たかい「インパール作戦」のような無謀な作戦にかりだされてなくなったひとの死は「無駄死に」「犬死に」といわざるをえないものである。しかし、こ

のようになくなつたひとも「英靈」とかいた瞬間に、作戦の無謀さも、命令の苛酷さもおおいからされて、けだかくうつくしいものにさえなつてしまう。漢字はその事実のもつてゐる実態をおおいかくし、うつくしく高尚なイメージをあたえてしまふからをもつてゐるようにおもう。このちからはこれまで為政者によって庶民をだますことにつかわされてきた。そして、それはいまでも基本的にかわっていない。もっとも最近は「云々」がよめなくとも首相がつとまっているが。

■最近、日本の大学では授業を英語でおこなう講座がふえているときく。これは、ひとつには日本の学生の英語力をたかめるためであろうが、ひとつには外国からの優秀な留学生をふやすためでもある。東京大学をはじめとして、世界の若者が日本の大学をえらばなくなつてると報じられているが、これは日本の大学のレベルがおちているからというよりも、日本でたかいレベルの学問をまなぶとすればそれだけおおくの、複雑なかたちの漢字をおぼえねばならないからという理由もあるのではないか。特に理系の論文は、現状では英語でかかねば発表しても世界に通用しない。時間をかけてでも日本語を「世界語」に、英語、中国語、スペイン語につぐ程度には世界で通用することばにすることをかんがえるべきではないか。このところ、毎年のように秋になるとおおさわぎする「ノーベル賞」受賞者の数をみても、日本の科学技術が世界に通用するものであることはまちがいないとおもわれる。しかし、これらのほとんどが「英語」で論文発表してこそであるとなれば、なんともかなしいことではないか。

■これらのことからわたしは、日本語から漢字を追放する（すなわち、可能なかぎり漢語をなくす）ことの意味はあるのではないか、そうかんがえるようになってきた。もちろん漢字のすきなひとが趣味で漢字をまなぶことまで否定しない。まずは、日本語をまなぶこどもたち・第二言語として日本語をまなぶ外国人の負担を軽減し、そうすることでこどもたちの可能性をひろげ、日本語をさらにおおくの世界の人たちにまなんでもらつて世界に通用する言語にしていくことをめざしたい。

<次回はコリア語から漢字をなくすこと可能にしたハングルの力についてかんがえていきます。>